



就学期に身につけたフィジカルリテラシーが成人以降の運動・スポーツ参画に与える影響：生涯スポーツ参画を促す高等学校体育授業の検討を通じて

乾, 順紀

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2025-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9099号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496380>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏名	乾 順紀
専攻	人間発達専攻
指導教員氏名	長ヶ原 誠

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

就学期に身につけたフィジカルリテラシーが成人以降の運動・スポーツ参画に
与える影響について：生涯スポーツ参画を促す高等学校体育授業の検討を通じて

論文要旨

本研究の目的は、フィジカルリテラシーが運動・スポーツ参画に与える影響について、就学期から成人以降を通じた検証を行なうことであった。また、そのうえで、成人以降の生涯スポーツ参画実現を目標とする高等学校体育授業において、フィジカルリテラシー向上を目的とした授業プログラムの開発と実践を通じて、わが国の教育現場でのフィジカルリテラシーの適用可能性を検討することであった。

この目的を達成するために、本研究では7つの章構成を行なった。まず第1章では、研究の背景として、本研究の中心的な概念である運動・スポーツ参画やフィジカルリテラシー研究の現状と課題について概観した後、研究の目的と章構成について説明した。第2章では、本研究に関連するフィジカルリテラシーや体育理論といったキーワードに沿って先行研究の検討を行ない、それらを整理して研究の課題をまとめた。

第3章では、「学校体育と生涯スポーツの分断」と表されるわが国の運動・スポーツの現状から、就学期と成人以降で運動・スポーツ参画がどう変わるのかを、運動・スポーツ経験や年代による影響とともに検討した。第1節では「実施キャリア」をキーワードに、成人のスポーツ参加のキャリアパターン(過去1年間の種目継続・開始・中止・再開始経験)について、過去の経験も含めた運動・スポーツへの参画状況が、年代とどのように関連しているかを検証した。その結果、成人の運動・スポーツ実施キャリアについては、キャリア別にスポーツ参画状況と年代の関連に違いがみられた。さらに、各キャリアにおいて、就学期の経験に加え、過去1年間の実施以外の参画行動(観戦・ボランティア参加)が50歳以上の群に関連していた。これより、成人層の運動・スポーツ実施を促進するためには、運動部活動経験だけでなく、成人以降の観戦やボランティアを含めた運動・スポーツへの幅広い参画について考える必要があることが示唆された。また、第2節では、「持ち越し効果」をキーワードに、就学期の運動部経験と年代による影響を合わせて分析した。その結果、就学期に運動部への所属経験を有するほど成人以降の運動・スポーツ参画状況が高い傾向がみられ、この傾向は実施、観戦、ボランティアの全ての参画形態で共通していた。したがって、就学期に運動部所属経験を有することは、成人以降の参画の広がりにも貢献していることが示唆された。

第4章では、先進的にフィジカルリテラシーの検討が進む海外における評価尺度を援用して日本語版フィジカルリテラシー評価尺度を作成し、わが国の学校現場でのフィジカルリテラシー

評価の適用可能性を検討した。まず第1節では、カナダにおいて学校体育の評価指標としても位置づけられているCanadian Assessment for Physical Literacy (CAPL)の一部であるChildren's Self-Perception of Adequacy in and Predilection for Physical Activity (CSAPPA)の日本語版尺度を作成し、わが国での動機づけ・自信評価尺度としての適用可能性を検討した。その結果、信頼性係数や項目の弁別力の検証では十分な値が得られ、外的基準として設けた運動・スポーツ実施状況等に関する項目とCSAPPA尺度合計点には、中程度の正の相関がみられた。共分散構造分析による分析モデル検証では、モデル適合度も良好であり、多母集団同時分析から男女でのモデルの類似性が認められた。以上より、信頼性と妥当性が認められた日本語版CSAPPA尺度を作成でき、新体力テストとの組合せからわが国におけるフィジカルリテラシーの動機づけ・自信評価尺度としての適用可能性を示すことができた。第2節では、対象を高校生とし、この世代への適用について評価が高い評価尺度であるPerceived Physical Literacy Instrument (PPLI)とAdolescent Physical Literacy Questionnaire (APLQ)の日本語版尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証した。その結果、PPLI・APLQ両尺度の信頼性に関しては、項目の弁別力と信頼性係数で十分高い値が得られた。また、基準連関妥当性については、両尺度と運動・スポーツ実施頻度や今後の実施希望に相関はみられなかったが、各尺度とそれぞれの外的基準と実施以外の参画行動に有意な相関がみられた。確認的因子分析の結果からは両尺度の3因子構造について構成概念妥当性が認められ、さらに多母集団同時分析の結果からは因子不変性が認められ、両尺度の構成モデルには男女での類似性が認められた。以上より、基準連関妥当性の確認に一部課題を残したが、2つの有用な日本語版フィジカルリテラシー尺度を作成することができた。

第5章では、現在定期的に運動・スポーツを実施している成人(社会人)を対象とした面接調査から、就学期を通じてフィジカルリテラシーが形成されていくプロセスを質的に検証した。その結果、まず幼少期における運動・スポーツの実施に始まり、主に学校運動部での競技経験を通じて心身両面でフィジカルリテラシーの基盤が形成されていた。そして成人後は運動・スポーツに対する志向性の再構築を経て、就学期の経験とともに主に内的な面から現在の運動・スポーツ参画を支えるフィジカルリテラシーを成熟させている過程が明らかになった。主に運動部活動を通じた競技経験がフィジカルリテラシーの形成に最も大きく貢献しており、就学期は運動・スポーツ実施がフィジカルリテラシーを形成するが、成人後は成熟したフィジカルリテラシーが運動・スポーツ参画を支えるという形で、就学期とは逆の関係性になっていた。また、就学期後半からその後またがる志向性の広がりや再構築は、学校体育と生涯スポーツは、フィジカルリテラシーの成熟という観点では内面で繋がっていることを示唆するものであった。

第6章では、高等学校体育科の体育理論領域に着目し、高校卒業後の生涯スポーツ参画を促す高校生の体育授業プログラムを開発・実践し、その効果を検証した。プログラムの評価や作成にあたっては、第4章で開発した日本語版フィジカルリテラシー評価尺度を用い、第5章で明らかになったフィジカルリテラシーの形成過程を展開内容の参考にした。その結果、フィジカルリテラシー評価尺度について、知識に関する項目はじめ、複数の項目や因子合計点で有意な向上がみられるなど、授業プログラムの介入効果がみられた。また、その効果には性別や運動部経験により差がみられることが明らかとなった。さらに、本研究で用いた2つのフィジカルリテラシー評価尺度が今後の「する・みる・ささえる」の3つの運動・スポーツ参画希望に有意に影響していることが明らかになり、それらの関連を「フィジカルリテラシーと運動・スポーツ参画希望の関連モデル」として示すことができた。

これらの成果を踏まえ、第7章では、フィジカルリテラシーと運動・スポーツ参画の関連を総合的に論議した。まず、フィジカルリテラシーが運動・スポーツ参画に影響を与えるのは主に成人以降になると考えられた。欧米の体育科教育において12歳までに身につけることが目標とされている、主に身体的能力という意味で扱われるフィジカルリテラシーと、複数の構成要素からなるフィジカルリテラシーの概念とが併存する理由として、年代の違いによりフィジカルリテラシーの果たす役割に変化が起きることが考えられた。また、就学期に身につけたフィジカルリテラシーは成人以降に持ち越し、運動・スポーツ参画に好影響を与えると考えられた。このような点から、フィジカルリテラシーは、運動・スポーツの規定要因研究において長く重要な要因として語られてきた「過去の運動・スポーツ経験」を包含するものと捉えることができる。そして、運動能力や身体活動量といった身体面、スポーツに対する意識や自信といった心理面などの多様な面から、その後の運動・スポーツ参画に影響するものと考えられた。

また、これまで分断されていると考えられてきた就学期と成人以降の運動・スポーツ参画が、就学期後半から自らの運動・スポーツに対する志向性を省察し、再構築するという過程を通じて内面で繋がっていることを明らかにできた。同時に、運動・スポーツに対する志向性の幅が広がるのが、成人後の幅広い参画行動に繋がる点も大規模データの検証から明らかとなった。これは、成人以降に運動・スポーツ参画状況が多様化することを示唆してきた先行研究を支持するものであり、フィジカルリテラシーの概念を用いることでその状況を説明することができた。このような環境変化の前後については、その時期の規定要因と運動・スポーツの関連を示すことが難しく、これまでに詳しく捉えきれていない面があったため、運動・スポーツ参画について就学期から成人以降への移行期の適応過程を説明できた点は、本研究における重要な成果であった。

さらに、早乙女・Culos-Reed (2018) の示すわが国のフィジカルリテラシー研究における3つの課題に沿って、本研究の成果を基に論議を進めた。1つ目の課題である「フィジカルリテラシーの評価方法の確立」については、日本語版評価尺度の開発を通じてフィジカルリテラシー評価に関する具体的な項目の「見える化」が図れたことは、その概念の理解促進と今後の活用のために重要な成果であった。尺度の活用により、これまで難しかった認知的領域や情意的領域の評価が可能になる。また、これまでわが国においてフィジカルリテラシー評価尺度と新体力テストとの組合せについて実際に検討した報告はみられなかったが、本研究ではその検討を取り扱うことができ、学術的・実践的両面での意義があったといえる。フィジカルリテラシー評価においては、運動・スポーツに参加する上での自己評価も欠かせないことから、生徒が自己評価ツールとして使用することも有益な活用方法であると考えられる。

2つ目の課題である「フィジカルリテラシー育成プログラムや体育授業などの効果の検証」の必要性については、理論的な枠組みを用いて計画的に授業を展開することで、各章の結果を基に作成した授業プログラムから短期間の介入でも効果を認めることができた。実際の体育授業では、学習指導要領に目標として示される「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する」という点をなかなか具体的に実践できていない状況が窺える。しかし、教員の働き方改革に伴う部活動改革が叫ばれる昨今、全ての生徒に学習の機会を提供できることの意義を理解して正課体育の中で生涯スポーツに関する教育を積極的に行なうことが「生涯スポーツ参画人口の拡大」に向けて重要になるであろう。

3つ目の課題は「フィジカルリテラシーと生涯を通じた健康的な生活との関連性の検証」の必

要性であった。将来の運動・スポーツ参画に関して、長期の予測妥当性を検証することはできなかったものの、質的・量的両方の側面から生涯を通じた健康的な生活とフィジカルリテラシーの関連を示すことができた。これは、体育科教育が「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する」ことを目指すうえで大切な成果である。運動・スポーツ参画とフィジカルリテラシーの関係性が分析モデルとして示されたことで、評価尺度によって測定される具体的なフィジカルリテラシーを高めることに焦点を当てることができる。フィジカルリテラシー概念を核とした枠組みの中で生涯発達の視点からも検討ができれば、全年代を対象とした生涯スポーツプロモーションを具体的に進められる可能性も広がるであろう。

(注) 3,000～6,000字 (英語の場合は1,000～2,000語) でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏 名	乾 順紀		
論文題目	就学期に身につけたフィジカルリテラシーが成人以降の運動・スポーツ参画に与える影響：生涯スポーツ参画を促す高等学校体育授業の検討を通じて		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	長ヶ原 誠
	副 査	教授	高見 和至
	副 査	准教授	秋元 忍
	副 査	教授	前田 正登
	副 査	准教授	石原 暢
要 旨			
本審査委員会は、令和7年2月5日に論文審査及び最終試験を行い、次のような結果を得たので報告する。 本論文の目的は、フィジカルリテラシーが運動・スポーツ参画に与える影響について就学期から成人期に着目し、特に生涯スポーツ参画に繋がる高等学校体育授業において、フィジカルリテラシー向上のための授業プログラムを開発することを目的とした。この目的を達成するため、本論文は以下に示す7つの章により構成された。 まず第1章では、研究の背景として、運動・スポーツ参画とフィジカルリテラシーの分野に関する研究動向と課題を明示し、引き続き第2章では、体育理論に関する先行研究の知見を元に、問題の所在と本研究の意義、さらに章構成に関する論理的根拠を提示した。 第3章では、就学期から成人期までを通じた運動・スポーツ参画の関連性に着目し、過去の経験も含めた運動・スポーツへの参画状況が、年齢層の増加に伴い、どのように変化していくかを検証した。これと同時に、就学期の運動部経験と年齢の影響を合わせて分析した結果、就学期の運動部所属経験が、成人期における運動・スポーツの実践、観戦、ボランティア等の支援行動までを含めた全体の参画状況に対して正の相関性を示し、就学期における運動部所属経験の重要性を示唆する結果となった。			

第4章では、海外で開発された評価尺度を援用した日本語版フィジカルリテラシー評価尺度を作成し、その内容妥当性、構成概念妥当性、基準妥当性の各検証と共に、学校体育授業における評価指標としての適用可能性を検討した。

第5章では、前章までの定量的分析に加えて、定性的な分析視点から、就学期のフィジカルリテラシーが、どのように成人期の運動・スポーツ実践に影響していくのか、そのプロセスに着目した分析を行った。その結果、就学期は主に学校運動部での競技経験と学校体育との相互作用から、心身の両面においてスポーツ実践を核とするフィジカルリテラシーの起点が形成され、成人以降に運動・スポーツに対する観戦や支援までを含めた行動参画の全体が再構築と、現在の運動・スポーツ実践の継続化と共に、フィジカルリテラシーの成熟化を示す研究知見が得られた。

第6章では、高校卒業後の運動・スポーツ参画意図を促すことに着眼した高校生を対象とする体育授業プログラムを開発し、本研究で作成したフィジカルリテラシー評価尺度を目的変数とした効果検証を行った。その結果、フィジカルリテラシー評価尺度について、身体への知識・認知面に関するカテゴリー項目を中心に、身体能力や今後の能力向上意欲を含めた複数の因子に対する有意な向上が見られ、本研究で開発した授業プログラムの有効性を示すものとなった。さらに、これらのフィジカルリテラシー評価の向上は、今後の運動・スポーツの実践、観戦、支援行動に関わる総合的な運動・スポーツ参画への意欲の向上にも繋がっていることが明らかとなった。

最終の第7章では、総合論議としてこれら一連の分析過程と、定量・定性の両手法から得られた分析結果を統合し、就学期のフィジカルリテラシー形成から、成人期の運動・スポーツ参画への影響過程を示す生涯スポーツ参画モデルを提示した。加えて、本研究で開発した学校体育でのフィジカルリテラシーに着目したプログラムの有効性と課題についても論議し、本論文の研究成果と共に、教育現場における適用性と今後の学術的課題を提示した。

以上の経緯と内容を踏まえ、本論文は博士論文の5つの評価基準である、「獨創性」「専門性および学術性」「実証性」「論理性」「先行研究・資料の適切・厳密な取り扱い」を充足しているものと評価できる。また、学位申請者は、筆頭著者として本論文に直接関わる下記のレフェリー付き学術論文を発表しており、博士学位申請に関わる参考論文の要件を満たしている。

- 1) Junki Inui, Makoto Chogahara, Kei Hikoji, Megumi Tani, Daichi Sonoda, Yuki Matsumura, Masaki Aoyama, Jun Matsuzaki, Keita Miura, and Kohei Yamashita. (2022) Relationship between Age Group and Sports Involvement Status Over the Past Year in Adult: From Examination of Experience of Adherence, Dropout, Adoption, and Resumption Career. *International Journal of Sport and Health Science*, 20: 208-223.
- 2) 乾 順紀, 長ヶ原 誠, 彦次 佳, 谷 めぐみ, 藺田 大地, 松村 雄樹, 青山 将己, 松崎 淳, 三浦 敬太, 山下 耕平 (2022) 就学期の運動部所属経験が成人層の運動・スポーツ参画状況に与える影響: 成人以降のスポーツ活動の多様化に着目して. *生涯スポーツ学研究*, 19(1): 1-12.
- 3) 乾 順紀, 長ヶ原 誠 (2024) 日本語版フィジカルリテラシー評価尺度作成に関する研究: わが国の高校生への適用可能性. *生涯スポーツ学研究*, 21(1): 63-76.

以上より、本審査委員会は、学位申請者の乾 順紀氏が、博士（学術）の学位を授与されるに足りる十分な資格を有するものとして認める。